

ろベルギーは北半はフラマン語圏、南半はフランス語圏で、リエージュは後者を代表する都市であり、ワロン運動が盛んだから街中でも英語は殆んど通用しない。

アレキサンドル・ピール夫人はジャン・アレキサンドル教授の奥さん（ピールは結婚前の旧姓）だが、自らも地形学者である。リエージュでの案内は一切引き受けようという夫人の親切に甘えることにした。早速午後には迎えに来て下さり、リエージュ大学の自然地理学教室を案内して下さい。100年ほど前の古い建物で、後から中二階を継ぎ足したりして部屋を増やした様子もあり中の構造は複雑である。そこでアレキサンドル一家つまり歴史学者の子息ピーターや二人の娘さんなどに紹介された。教授の主宰する講座で夫人も講師をつとめ、御子息も同じ大学に勤めている関係もあるが、教室すなわち家庭の延長といった趣きなにはいささか驚いた。教室の名称に熱帯地形・気候・水文教室の副題がついており、都市気候のエリプクム氏からもリエージュの気温分布や大気汚染の説明をうかがえた。この大学の同窓生の御夫婦が教室を運営されているのだから、雰囲気は和やかで暢気な感じだが、夫君が兼務先のザイルの大学へ出かけて長期間留守にしてもうまく運ぶための仕掛けのようでもある。

同じ大学にピサール教授の主宰する地形学・第四紀地質学教室がある。翌21日は朝からその教室のシャベル氏の案内で、ミューズ川対岸の城趾付近にある野外観測場を見に出かけた。アルデンヌ高原につづく緩やかな丘陵斜面でのマスウェースティングの観測が地味に続けられていた。ピサール教室の方はメートルアシスタント（日本の大学の専任講師に相当する）が5、6人もいて、その午後は入れ代わりで現在研究中のテーマを説明して下さい。土じょう侵食のポリヌ氏、海岸地形のオザール氏、カルスト地形のエック氏などが次々と現われ、まことに熱心そのもので全体が活気に溢れていた。私もその気分につられて日本から持参した有珠岳のスライドを映写して説明してみた。「1日1メートル隆起する異常さ」に驚いた先生方は、もう少し滞在を伸ばして詳しく説明してくれないかと申し出る程であった。

同じ大学の自然地理関係の教室でさえ、互いに内容も気風も驚くほど異なるものだという感慨をもったのだが、これがヨーロッパの故だとも思えるし、大学というものだと云う風にも思える。そう言えば本学でも研究室の部屋ごとに先生によって机や椅子の配置から室内のおもむきが全く異っているようだ。

(1985年1月31日)

イギリスの万里の長城

井内昇

敵軍の進攻を高い壁を築いて防ぐ、という戦術的発想は、古くは中国の万里の長城を生み、近くは同種のものとして第1次・2次大戦で独・仏国境線沿いに、地下要塞マジノ線、ジークフリート線の構築となってあらわれた。ベルリンの壁もこの発想の延長であろう。しかし、団廓都市のように狭い区域を城壁でとり囲んで防衛する場合と違って、広い平面上に線状の障壁を築いても余り有効とは思えない。史上最大規模の中国の長城は、最近新生中国の観光名所として外貨獲得に貢献しているらしいが、この長城は本来の目的である北狄の南進防止の役には立たなかったし、マジノ線、ジークフリート線も結局は敵の進攻を防げなかった。にもかかわらず、人間は古今東西を通じて同じ発想をくりかえし、各地にこの種の長城の例をみることができる。

このような長城の中で、意外に知られていないのがイギリスの長城—ハドリアヌスの長城—であろう。この長城は、紀元1世紀にブリテン島に侵攻したローマ軍が、

スコットランドの蛮族の北からの攻撃を防ぐ目的で2世紀初めに築いたもので、ブリテン島の東西の幅が最も狭くなる北海沿岸のタイン川河口から西のアイリッシュ海沿岸ボウネスまでの約120kmの間に構築されている。

昨年8月、IGC出席の折、イギリスの地方都市と農村部を見たいと思い、約10日間、レンタカーでイングランド、ウェールズ、スコットランドを一人で旅行した。

この機会に途中でこの長城に寄ろうと考えたが、日本でも、ロンドンでも具体的な情報は手に入らない。しかしイギリスで入手した40万分の1地形図をみると、城壁の所在を示す記号が断続して記入されている。そこで地図上に城壁の記号が最も長く残っている所に行くことにした。8月某日、朝早くミドルズブラの町を出発、途中タインサイド重工業地帯の中心サンダーランドの斜陽化の現状を観察し、ワシントンニュータウンに立ち寄り、1時過ぎ、長城に近いコールブリッジの町に着く。町の中心の案内所でわかったことは、この長城はイングランド

北東地方では一寸した観光名所らしいということである。というのは、長城の写真や案内地図が沢山張ってあったからである。時間が無いので係員に「何処が見どころか？」と聞くと「Housesteadsがよい」と教えてくれた。再び地図を頼りに走ってゆくと次第にマイカーや観光バスが前後にふえはじめ、やがて大きな駐車場に到着した。附近はイギリス特有のスケールの大きいうねるような起伏の丘陵地で、樹木は皆無に近く、一面ヒースで掩われた荒地で羊が草を食んでいる。大きな谷を横切って約15分も歩くとそこに Housesteads の保塁の遺構が緩い斜面にひろがっていた。

この長城には1マイル毎に小保塁が築かれ、さらに一定の間隔を置いて全部で17の大きな保塁が設けられている。Housesteads は AD. 125~128 に築かれた最大の保塁で、面積約2 ha、約1000人の歩兵の常時駐留が可能であったという。遺構は環境省によって発掘、整備、維持

が行われている（その代り入場料をとる）。保塁の北に接して東西方向に城壁が延々と伸びているが、城壁といっても高さ2~3メートル（その上に銃眼付の石壁がさらに1~2メートル）、幅2.5メートル程度の石積みにすぎず、ブリテン島の各地でみられる放牧地の境界用石垣と大して変らない。この程度の石垣ではたして北からの蛮族の侵入が防げたものかどうか、或いは、単に国境を示す程度の意味しかなかったのか不明だが、見張所や大きな保塁の遺構、石垣の上の銃眼などをみると、やはりこれが純軍事的な防衛用の城壁であったことが理解できるのである。

ローマ軍はこの長城を約400年にわたって維持したが、400年もの長い間、家郷を離れ、当時は地の果てにも思えたであろう北の防衛線に連れてこられたローマ兵たちは、一体どういう想いでこの荒涼たる景色を眺め、家族のことを考えたかと思うと胸が傷んだ。

劉先生のこと

内藤博夫

昨年の9月から10月にかけて中国から地理学関係の3組の代表団が来日した。中国科学院長春地理研究所代表団（5名）、四川省地理学会代表団（5名）、中国地理学会代表団（4名）がそれである。これら3代表団の訪日は日本の地理学者の有志でつくっている日中地理学会議の招聘によっている。たまたま私は日中地理学会議の事務局の仕事にたずさわっていたことから、2ヶ月間という比較的短い期間に13名もの中国の研究者と親しく接することができた。長春地理研究所の所長で同研究所訪日代表団の団長をつとめられた劉哲明先生もその中の1人であった。劉先生は日本語がお出来になる。先生はまた中国地理学会代表団の一員でもあられたので、長春地理研究所一行が帰国した後も日本にとどまり、日本の地理学者との交流を続けられた。したがって日本での滞在期間は14名の中で劉先生のそれがもっとも長いものとなった。この間に劉先生からは御自身のことも含めて多くのことを教えていただいた。こうしたことが劉先生に対する印象をとくに強いものにした原因のように思う。

劉先生は1925年7月のお生まれなので59才、中国東北地方の吉林省の出身である。1939年に吉林市第三国民高等学校商科に入学された。当時の東北は満州国の統治下にあり、先生は簿記などを勉強するかたわら日本語もこの学校で学ばれた。教師の半数は日本人であったそう

である。もちろん日本人教師による授業は日本語で行われた。先生の日本語力はこの時期につちかわれたのである。1943年に国民高等学校を卒業した先生は同じ年に工農合作社という会社に就職された。合作社という和人民公社に先立つ農業生産組織を連想させられるが、当時のそれは企業一般を指したものでらしく、先生が就職したところは大連に本社をもつ日系企業であった。この会社での勤務は1年で終り、1944年から47年までの3年間は無職であったという。第2次世界大戦終了の年を間にはさむこの期間に、どのような生活を送られたのかうかがって見たが、「英語の勉強をしていました」と言われただけでくわしいことは不明のままに残された。先生が29才から32才にかけての時期のことである。1947年になって先生は長春大学法学院に入学し、法律の勉強をはじめられた。この頃から中国では国民党と共産党の間の内戦が激化し、共産軍の攻勢によって国民党政府の管轄下にあった長春大学は先生が卒業期を迎える前の1949年に閉鎖されてしまった。やむなく先生は同じ長春市内にある東北師範大学地理系（地理学科のこと。ただし規模からいえば系は日本の学部に対応する）に入学した。つまり先生は中華人民共和国が成立した1949年から地理学の勉強をはじめられたのである。1953年に東北師範大学を卒業した後、先生は北京にある中国人民大学に入学し、